

北米からみる「地域」と大学での学び

－ 海外フィールド演習『グローバル時代における北米の多文化社会』の一考察－

中 朋美*・ケイツ・キップ**

Student Reflection on Regional Studies and Higher Education in North American Study Tours

NAKA Tomomi*, CATES Kip**

キーワード：スタディー・ツアー、異文化理解、アメリカ、カナダ

Key Words: Study Tours, Intercultural Understanding, United States, Canada

I. はじめに

2013年度から鳥取大学地域学部で正式に単位化された海外フィールド演習は、今年度で3年目を迎える。現在、韓国、中国、ベトナム、インドネシア、北米といった様々な地域で海外フィールド演習プログラムが実施されている。その内容も担当する教員の専門等を生かし多様で、参加希望の学生はいくつものプログラムから選択することができる。ここではその中の一つである北米プログラムを取り上げ、参加学生の学びの様子について考察する。

海外フィールド演習に限らず、大学での学びを地域の活動につなげる動きは以前にもあるが、高等教育における学生の主体的な学びを重視するアクティブラーニング、地域での奉仕活動等をつうじて知を深めるサービスマーケティングを取り込む動きとも相まって、ますます重要なものとなっている。加えて近年では、日本の地域だけではなく、海外においても主体的な学びや体験が重視されてきている。グローバルな環境で活躍できる人材育成を目指す文部科学省のグローバル人材育成推進事業などがそういった動きの代表的なもので、鳥取大学の海外フィールド演習もそういった流れと支援の上にプログラムが展開されている。またこの授業は、地域を地元といった国内だけではなく国外から多角的に考える機会を提供する点で鳥取大学地域学部での特徴的なカリキュラムの一部となっている。

こうした教育面での動きは、研究の分野にも影響を及ぼしている。例えば文化人類学ではここ数年の間に、応答の人類学、あるいは公共人類学といった比較的新しい名称を用いながら、人類学的な知の公共的な役割や研究対象となっている人々やグループとの協働の実践と課題の検討がなされている。¹ 過去にも同じような動きがなかったわけではなく、また経済的、社会的な力関係の不均衡など改善すべき問題もたくさんあるが、研究機関のための研究にとどまることのない、広い意味での貢献の可能性の模索への関心が高まっていることの表れともいえる。そんな中、地域学部の海外フィールド演習での学びの検討は、広く大学教育的において、そして研究面においても有益なデータと考察を提供することができる可能性がある。

*鳥取大学地域学部地域文化学科

**鳥取大学地域学部地域文化学科

北米プログラムは、2012年度に鳥取大学が文部科学省のグローバル人材育成推進事業に採択されたのを契機に2012年度にパイロットプログラムとして実施され、2013年度から本格的に海外フィールド演習の一つとして加わった。北米でのプログラム実施の理由には様々あるが、主な理由の一つには、アメリカ、カナダには多様な文化的、社会的、言語的な背景を持つ人々やコミュニティーが数多く存在し、地域や国家の複雑な関係を多角的に考察する場に事欠かないことがある。特に西海岸の都市は日本を含めたアジア系移民も数多く、歴史的にも現在においてもアジアと深いつながりがある点で日本やアジアを外から考えることができる。また、英語圏であるので、学生が現地の様々な文化的、社会的背景の人々とのコミュニケーションを英語で直接とることが出来、国際語としての英語でのフィールド体験を実践できる場である。こういったことから海外フィールド演習のプログラムの一つが北米で行われている。2013年度以降は、日系アメリカ、カナダ人の体験を中心にグローバル社会における北米の多文化社会 (Multicultural North America) というテーマで実施されている。

以下ではまず北米プログラムの概要を、訪問先、参加者、プログラムの構成を中心に紹介する。そして学生のレポート、日誌、事前と事後の面談コメントなどを参考にしながら、学生の学びの様子を考察していく。学生のコメントからは、彼らが多民族社会や文化的アイデンティティーについての理解を深めるとともに、大学での学びについて振り返っている様子がうかがえる。中には研修後、自分なりのテーマをさらに探求する学生や、今後の方向性の展望の見直しをするものもいた。北米プログラムでの学びが、研修期間といった短期間での学びにとどまらず、大学での学びを深める機会を提供している様子について詳しく検討していく。後半の考察部分では、今回の論文のテーマや構成上の理由から特に日系アメリカ・カナダ人関連に関するコメントを多く引用している。しかし、北米プログラムで触れる文化、言語、宗教、社会体験は多様である。今回はその中でも特に学生の学びの過程をよく表しているコメントの代表例を取り上げている。これらのコメントはそういった様々な体験の中で出てきたものである。

II. 北米プログラムの概要

1. 訪問地

北米プログラムは、アメリカ、カナダの2か国に渡り3つの地域をめぐる点ではほかの海外演習プログラムとは少し異なる構成となっている。全日程が2週間に満たない中でいくつもの地域をめぐるのは容易ではない。しかし2か国をめぐることで、そしてアメリカ国内の2都市を巡ることによって、国家レベルの違いや地域性について体験的に考えてもらえたらとの思いから訪問地が選択されている。例えば、第2次大戦中や戦後において、日系人に対する政策はアメリカ、カナダではかなり異なる。また同じ西海岸の都市でも日系人コミュニティーの歴史や現状も違う。体験談や施設訪問を通じてそのような相違点を感じることは、国が人々の生活に与える影響について考えを巡らす機会を与えてくれる。またアメリカでの都市間の違いを知ることによって、アメリカの地域性を体験し、研修での体験を相対化し、より立体的で複雑なアメリカ社会の理解を促すよう3都市を巡る構成となっている。

3都市の訪問の順序は、実施年度で異なる。先方の予定や、研修期間の曜日の組み合わせや航空券等の値段等を考慮して各都市の訪問の日程を決定している。

表1. 2013年度の日程

2013年	11月	参加者募集(25日締め切り)
	12月	航空券, 宿泊先手配 先方との打ち合わせ 事前学習会(2月まで6回開催) 出発前個人面談
2014年	2月27日	関西空港出発, サンフランシスコ経由でサクラメントに到着
	2月28日	University of California at Davis 訪問
	3月1日	Davis の町を散策後アムトラック(電車)でサンフランシスコに移動
	3月2日	Glide Memorial Church 訪問, 市内散策 鳥取県人会の小橋さんと会談
	3月3日	サンフランシスコ, ジャパンタウン, JCCCNC 等訪問
	3月4日	チャイナタウンなどを訪問
	3月5日	University of San Francisco 訪問 カストロ, ヘイトアッシュベリーを訪問
	3月6日	飛行機でバンクーバーへ移動
	3月7日	University of British Columbia 訪問
	3月8日	Nikkei Museum and Cultural Center 訪問
	3月9日	チャイナタウン, ジャパンタウン, ガスタウンを訪問
	3月10日	日本に向けて出発, サンフランシスコで乗り換え
	3月11日	関西空港に到着
	3月20日	JASSO 報告後, 帰国後のレポート提出
	4月	研修後の個人面談, 単位認定

表2. 2014年度の日程

2014年	10月	参加者募集(11月10日締め切り)
	11月	航空券, 宿泊先手配 先方との打ち合わせ 事前学習会(2月まで5回開催) 出発前個人面談
2015年	2月27日	関西空港出発, サンフランシスコ到着
	2月28日	サンフランシスコ, チャイナタウン, リトルイタリーを訪問 鳥取県人会の小橋さんと会談
	3月1日	Glide Memorial Church 訪問, 市内散策
	3月2日	サンフランシスコ, ジャパンタウン, JCCCNC 等訪問, 日系人の方との会談
	3月3日	University of San Francisco 訪問 カストロ, ヘイトアッシュベリーを訪問
	3月4日	アムトラックで Davis に移動
	3月5日	University of California at Davis を訪問

	3月6日	飛行機でバンクーバーへ移動
	3月7日	Nikkei Museum and Cultural Center 訪問 (日系人の方との会談)
	3月8日	チャイナタウン, ジャパンタウン, ガスタウンを訪問
	3月9日	University of British Columbia を訪問
	3月10日	日本に向けて出発, サンフランシスコで乗り換え
	3月11日	関西空港に到着
	3月20日	JASSO 報告後, 帰国後のレポート提出
	4月	研修後の個人面談, 単位認定

A. デービス

デービスは鳥取大学の学術交流協定校のカリフォルニア大学デービス校がある町である。カリフォルニアの州都サクラメントに近く、アメリカの国勢調査によると、市の大きさはおよそ 27 平方キロメートル、人口は 2010 年の資料では 65,622 人で、その 2 割ほどがアジア系である。² サクラメントから西に 11 マイル、サンフランシスコから北東に 72 マイルの位置にある町である。³ サンフランシスコやロサンゼルスとは異なり、比較的落ち着いた大学町である。車が主要な交通手段であるアメリカの中でも自転車のまちともいわれるほど自転車をよく見かける。デービス校はカリフォルニア大学のシステム一つの大学で、およそ 35,000 人の学生が在籍している。⁴ キャンパスも広いが、後で述べるブリティッシュコロンビア大学に比べると全体的に小さい。

デービス校では、Department of Asian American Studies, Japanese Program (Department of East Asian Languages and Cultures), English Program (UC Davis Extension) の 3 プログラムを訪問している。Asian American Studies 学部では Wendy Ho 先生に学部の概要について説明していただいている。研修前の段階では、人種やエスニティーについてなかなかうまく理解できていない学生が多いが、Ho 先生は例を挙げてわかりやすくご説明してくださっている。日系人の歴史等を研修で学ぶなかで、Ho 先生のお話は聞ききた話と理論的な枠組みとの橋渡しの役割を果たすことが多い。

Japanese Program では榊原先生のお話をお聞きするとともに、日本語を学ぶ学生との交流を行っている。榊原先生は日本生まれであるが、日系のアメリカ人の男性と結婚され長年にわたりデービス校で日本語を教えておられる。日本語をアメリカで教えるということとともにアメリカに暮らす日本人としての経験、広い意味での国をこえての日本人としての在り方についての考察など、多方面にわたるお話をされる。非常に印象に残った話としてコメントする学生は毎年多い。

English Program (UC Davis Extension) では Paula Khodaverdi 先生、Mary Crumbley 先生などから外国語として英語を学ぶプログラムについて話を伺っている。授業構成だけではなく、外国からやってきた学生がデービス校で生活する際に重要な心構えや注意点の説明が丁寧になされる。英語での説明に慣れていない学生にとってもわかりやすい英語表現で、はっきりと話してくださるので、デービスの生活の概要を掴み取りやすい。

このほかにも、過去 2 年は Viticulture and Enology を学ぶ Grant Wilson さんによる施設紹介してもらった。またデービスの町の博物館を散策したり、ファーマーズマーケット訪問したりと時間が許せばデービスの町の散策も組み入れている。

B. サンフランシスコ

サンフランシスコは国際便の発着地であるとともに、文化的な施設、観光地が多い。サンフランシ

スコ市はおよそ 120 平方キロメートル、2010 年のデータでは人口は 805,235 人である。⁵公共交通機関も比較的良好に発達しており、バス、地下鉄等を使えば様々な施設を訪れることが出来る。学生は教員のサポートのもと公共交通手段を事前に調べ、訪問先への経路の計画を立てる練習をする。

ここでの訪問地は、ジャパントウン、**Japanese Cultural and Community Center of Northern California** (以後 JCCCNC)、ゲイ、レズビアンといったセクシャルマイノリティーの運動の中心地であったカストロ地区、ヒッピー文化で有名なヘイトアッシュベリー地区、イエズス会系私立大学である **University of San Francisco** を数日間かけて訪問する。

JCCCNC とサンフランシスコのジャパントウンはダウントウンの中心からバスで 30 分ほどのところにある。サンフランシスコのジャパントウンには紀伊国屋や日本料理店が入ったショッピングセンターなどがあるが、現在実際に住んでいる日系アメリカ人はそれほど多くない。しかし歴史的に重要な日本町の一つで、JCCCNC は様々なイベントや教室を地域に提供しており、日系 2 世をはじめ多くの方々が職員やあるいはボランティアとして運営に参加している。ここではプログラムディレクターの **Matt Okada** さん (2012 年度は **Ryan Kimura** さん) を中心に 2 世、3 世、4 世、そして戦後アメリカに移住した日系の方の体験を聞き、学んでいる。セミナー形式や、小グループに分かれディスカッション形式でお話を伺う。

University of San Francisco では学生によるキャンパスツアーで大学全体の紹介を受けるとともに、**Stephanie Vandrick** 先生の協力をえて、**Department of English, Center for Asia Pacific Studies, Critical Diversity Studies** の様子を教員の方々から伺っている。デービス校との相違点を知ることができるとともに、各大学の学びの特徴を知る機会となっている。特に **Critical Diversity Studies** は新しいプログラムで、エスニックスタディーといった従来の学問の枠組みをとらえなおそうという設立の背景についてお話を聞くことが出来る。

また、サンノセの鳥取県人会で活躍されている小橋夫妻との会談もサンフランシスコで行っている。小橋陽子さんは鳥取中部のご出身で、夫の司さんのお仕事の関係でサンノセに移られ、暮らしておられる。サンノセで鳥取県人会の方々とは知り合い、現在ではご夫婦ともに日系アメリカ人についての博物館である **Japanese American Museum of San Jose** や県人会のイベント等に参加されている。日程の関係で 2012、2013 年度ともにサンノセに訪問できなかったため、サンフランシスコでご夫妻にお会いし、その様子をうかがっている。今後は現地訪問し、鳥取県人会の 2 世、3 世の方のお話をお聞きしたいと考えている。

このほかにも多文化社会の一面を知ることのできる施設をできる限り訪問している。カストロ地区ではゲイライツの運動家ハーヴィー・ミルクの元事務所や **GLBT History Museum** の展示を見学したり、そこの職員の方から説明を受けたり、サンフランシスコでエイズや人種、セクシュアルオリエンテーション、経済的等を理由に社会から疎外感を感じている人々に長年にわたって積極的にかかわってきた **Glide Memorial Church** を訪問し、コンテンポラリーでエネルギッシュな礼拝にも参加している。学生の企画、提案によって **Contemporary Jewish Museum** やチャイナタウンと **Chinese Historical Society of America**、スペインの影響が残るミッション地区等も訪問している。

C. バンクーバー

2012 年度からはカナダのバンクーバーを訪問している。サンフランシスコと同様大都市で、市の面積はおよそ 115 平方キロメートル、人口は 2011 年の統計では 603,502 人である。⁶ 町中で耳にすることが出来る言語が数多くあり、多文化の町の様子をうかがうことが出来る。バンクーバーは日系人の歴史を知るうえで重要で、アメリカとカナダの違いを知ることで国、地域と多文化社会との考察

に深みを与えることが出来ればとの思いで訪問している。

バンクーバーの中心地から少し離れた郊外の町にある **Nikkei Museum and Cultural Center** (以下 **Nikkei Center**)では日系人の様子をうかがう展示や体験談、現地の日本語学校を見学する。センターのスタッフとともに事前にプログラムを準備し、訪問している。バンクーバーでの1世の人々の背景とともに、2世の方からは強制収容所の体験談をお聞きするのが中心である。過去2年は、偶然にもアニメのコスプレイベントが同センター内で開催されており、海外でのアニメを通じた日本文化への興味を少しではあるが感じる事ができた。

ダウンタウンの近くには旧日本人街がある。戦後日系人の多くはここに戻らなかったため、さびれた感じがするが、映画『バンクーバーの朝日』が活躍した場所である。過去2年は、近隣の浄土真宗の寺院 **Vancouver Buddhist Temple** を訪問し、青木龍也開教使のお話とともに、寺で開催されているスプリングフェスティバルを訪問している。お寺の門徒の方々には日系の人々が多く、フェスティバルではうどん、から揚げ、お饅頭といった日本食を味わうことが出来る。2012年度、13年度は鳥取大学から来たということで、お忙しい中、和歌山出身の日系2世の **Mizuta** ご夫妻の体験をうかがうことができた。

University of British Columbia もバンクーバーでの重要な訪問先の一つである。学生にキャンパスツアーで、学生生活や大学の様子を知るとともに、**Museum of Anthropology** や **Longhouse** の訪問を通じて、カナダにおける先住民の歴史や現状を少しではあるが学ぶ。また、新渡戸稲造にちなんだ **Nitobe Memorial Garden** などアジアとカナダのつながりが垣間見ることが出来るキャンパス内の建物等も見学する。

2. 参加者

アジア諸国と比べ、アメリカ、カナダへの航空券は高く、物価も高い。できるだけ費用を抑えるため、例年10月、11月頃を目途にすべての手配を教員が行っている。参加人数は過去3年では6から8名で、**JASSO** の奨学金枠の制限とともに教員2名が対応できる人数となっている。

正式に単位化されてからの学生の内訳は、2013年度が8名（文化学科7名、教育学科1名、うち2名が1年生）、2014年度は正規学生が6名（文化学科3名、教育学科3名、いずれも2年生）、中国からの短期留学生在が2名参加した。

比較すると、2014年度は海外渡航歴がある学生が増えている。このうち2名は、2年次の文化学科の地域調査実習での台湾訪問が初の海外経験としている。地域学部を含めグローバル人材関連事業での海外渡航の機会が広がっており、今後もこの傾向は続くと思われる。ただ、アメリカ、カナダやヨーロッパ諸国の訪問経験のある学生はなく、研修先をこれらの地域で行うのは、アジア以外の諸外国への知識や視野を広げることにつながると思われる。

表3 2013年度参加者の所属学部と性別

所属学科	男性 (人)	女性 (人)
地域文化学科	2*	5
地域教育学科	1	0

*いずれも1年生、他はすべて2年生

表4 2014年度参加者の所属学部と性別

所属学科	男性 (人)	女性 (人)
地域文化学科	0	3
地域教育学科	1	2
その他(短期留学生)	0	2**

**いずれも中国からの留学生、参加者はすべて2年生

表5 海外渡航経験

研修前の海外渡航回数	2013年度（人）	2014年度（人）
0	4	1
1	2	5
2回以上	2	2

研修前の渡航先は韓国、台湾、中国、フィリピンなど。アメリカ、カナダへの渡航経験があったものはいなかった。

3. プログラムの構成

初めての地を訪問する学生にとって、教員が引率し、ある程度行程を組んでいる研修は、安心感を与える。しかしそのため受け身的に知識を吸収するだけの旅になりかねない。フィールド演習として積極的な学びにつながればとの思いから、北米プログラムでは以下の4つの活動を組み込み、研修期間での学びをより充実を図っている。

A. 事前学習

参加者の多くは、北米社会や文化に対する知識はある程度あるものの、それについての詳しい知識、特にアメリカ、カナダの多文化に対する政策や日系人の歴史はあまり知らない。事前の学習することによって、現地の方とより踏み込んだ会談ができるように事前学習を行っている。2013年度はアメリカ、カナダについての一般的な社会の様子や訪問先の地理的な情報を事前に調べるよう勉強会を開いた。2014年度は、文献に加え、日系人の歴史を取り扱ったビデオを用いた。現地では普段聞くことが少ない専門用語などもでてくるが、事前学習の結果、ある程度推測ができ、理解がしやすくなればとの思いから実施している。学科や学年の違いで、都合のつく日程を見つけることが困難だが、昼休みや年末の休み等を利用して勉強会を開いている。また研修前に、北米研修に関連する本を一冊読み、その概要と感想についてレポート提出を求めている。2013、14年度とも学生の多くは文化学科の2年生後期授業「アメリカ文化史」を履修していることが多く、彼らは授業の内容等を踏まえてほかの参加者に適宜、背景知識を提供してくれている。

B. 担当班制度

北米プログラムでは、学生が小グループに分かれ、訪問する3つの都市のいずれかの担当となって、その都市での散策や食事等の計画を立ててもらっている。参加者の内訳からもうかがえるように、海外経験のある学生は限られており、アメリカ、カナダに行ったことがない学生が参加している。これらの学生が、教員による準備とサポート体制のもと、資料をもとに慣れない現地での計画を立て、自主的に行動する練習としてこの制度を組み込んでいる。

例えばサンフランシスコでは、現地の一定期間バス乗り放題のチケットの購入場所の検索、バスのルートの確認、散策時間の訪問先や食事場所の決定をしなければならない。そういった現地でのこまごまとした決断を担当者は、他の学生の意見をまとめながらまとめていく。学生からのコメントではこの担当制は好評で、知らない土地であっても助けを借りながら行動することができたとの自信につながっているようである。研修後、北米以外にも機会があれば旅行等したいという声も多く、また国外を含めた広い地域での活動も視野に入れることができるようになったと語る学生もいる。

C. 研修中の振り返り

新しい土地でいろいろな人々との出会いで感じたこと、思ったことを記録にとどめることができる

ように、研修中には様々な形で振り返りの時間を組み込んでいる。その一つは日誌で、期間中、どのようなことに興味を持ったのか、疑問に思ったのか、その理由等に対する質問に答える形式で、一日1ページにまとめて記入してもらっている。時差ボケもあり、朝から晩まで様々な行事がある中で、毎日ページを埋めるのは大変であるが、研修での体験を記録する一つの手助けとなっている。研修終了後に一度提出してもらい、その後コピーを取って各学生に日誌を返却している。教員にとっては、各学生の日々の体験をうかがう手がかりになっている。日々体調管理に気を付けている様子や、なじみのない食べ物についての感想、各部屋での休憩時の過ごし方などを知ることができた。

このほかに2014年度は主な行事の後、区切りのよい時間に皆で集まり、それぞれ感じたこと、学んだことについてコメントを出し合う時間を取った。学生の了解のもとボイスレコーダーを回し、それぞれ発言する形式をとることで、学生のその場での感想を記録した。最初こそ少し躊躇する学生もいたが、徐々になれ、相手のコメントをしっかりと聞くといった場にもなった。またその際に学生の理解が不十分だった点や関連事項の補足説明なども加えることができた。

D. 研修での課題

研修後、学生の多くは帰省したり、バイトに励んだりと連絡が取りにくくなってしまいがちである。少しでも研修での体験を総括してもらおうと、研修での体験についてのエッセイを提出してもらっている。2013年度はこの他に自分なりの小リサーチペーパーも課していたが、忙しさのあまり提出が遅れるケースがよく見られたため、2014年度には振り返りのエッセイのみに絞った。この他、個別に研修を振り返っての感想や課題等について語ってもらう個別面談を4月のできるだけ早い段階でおこなっている。学生が研修後の様子や、今後の研修先やスケジュール、課題の変更等を考えるための参考にしている。

III. 研修での学び

IIで見たように参加者の学科所属、海外経験、英語のレベル、学問的な関心やキャリアプランは様々で、彼らの学びを一つの水準ではかることは難しい。しかし学生の多くは、研修を契機に多文化社会や、アメリカやカナダと比較しての日本社会について、そして大学生としての自分自身についての考えをめぐらしている。さらに北米プログラムでは日系の人の体験談のように同じ出来事を違う角度から何回か体験することが多い。そういった類似の、そして繰り返し出会う体験を通じて、自分なりの考えを振り返り、時には修正していった様子がうかがえる。⁷

ここでは学生のコメントから主だったテーマとして浮かび上がった以下の3つの点、1. 文化的アイデンティティーやエスニシティ等についての学問的理解の深化、2. 大学での学びについての振り返り、3. 自分と周りとの関係性の捉えなおしについて考察する。これらは相互に関連しており、学生のコメントは必ずしも順に出てくるものでもない。しかし、学問的な理解が、現在の状況を振り返り、それに対する何らかの再認識を促しているプロセスがうかがえる。資料として参考に用いたのは、研修前後の個別面談、日誌、研修中の振り返りコメントである。なお、学生には調査についての事前の承諾を得ているが、個人が特定されて不利益が生じないよう、名前、性別、学科についての情報は省略している。

1. 学問的理解の深化

北米プログラムは日系人の体験を中心に、アメリカ、カナダにおける多文化社会をテーマとして構成されている。多くの学生は研修参加前にも、アメリカ、カナダにはたくさんの文化的、民族的背景を持つ人がいることをある程度知っている。と同時に日本語の使用や食べ物や慣習が当たり前でない

状況を北米で体験してみたいと思って参加したと語る学生を毎年しばしば見かける。多文化だとは思いつつ、自分たちがアメリカ、カナダではマジョリティーではない状態を体験し、自分がどれだけやっつけられるのか試したいという気持ちが参加の理由の一つにある。

ただ、実際にアメリカ、カナダがどのようにして異なる文化背景を持ってきた人を受け入れてきたのかといった歴史や現在の状況となるとなかなか想像力が及ばないことが多い。事前の勉強会では日系アメリカ人を例に移民の歴史について文献を読んでいるが、ほとんどすべての学生が初めて知る内容だと答える。また文献を読んだといってもなかなか生きた知識として応用できるほどの理解まで進んでいないことが多い。学生にとって研修での体験は、紙の上での歴史や状況を身近なものとして感じさせるきっかけとなるようである。

例えば第2次世界大戦前後での様子を日系人の方から聞いて、ある学生は以下のように述べた。

バンクーバーの朝日を日本ですでに見ていて、だいたいこんな感じだったよというのはイメージできていたんですけど…やっぱり現地でも日系のカナダ人の方にいろいろ話を聞いて、なんかリアルなところまで聞いてしまって…家畜のいるところに住んだり、大変だったんだなと思いながら昨日は見ていました。

本や映像では知っていたが、日本人だからという理由で特別扱いされた実際の経験はほとんどない。そういった学生にとって、自分ではどうすることもできない文化的、民族的背景での苦労話は、身に迫るお話だったようである。

別の学生は、戦中、戦後、日本とカナダを行き来しながらどちらの社会にもなかなかなじまず、借家や仕事探し等で苦労したお話をきいた日の振り返りとして、「(英語を長年習ってきたが、小グループに分かれて日系の方とのディスカッションの中で) *struggle* という単語を聞いたときに、ものすごく突き刺さるように聞こえて。すごく衝撃的でした。」と述べている。単なる知識としての表面上の認識から、もう少し自己に近づけて日系の方の歴史や体験を考えるようになっていく様子が見えるコメントである。

今でこそ日本人の姿をよく見かけ、またバンクーバーでは日本語で対応が可能な施設も多い。異文化を体験し、日本ではない体験を味わいたいという期待を持ってきた学生にとっては、そのことに驚く学生も多い。だが、そういった状態が決して初めからあったわけではないということを、日系人の方のお話などを通じて理解することができたとの発言が多い。

と同時に、同じ日系人といっても、世代や国、周りの環境によってその体験の捉え方が異なるということの気づきをもった学生もいる。研修では、カナダ、アメリカ両国の様々な年代の日系人のお話を聞くことが出来るように工夫している。そのことで日系人だからとひとくくりに捉えてしまうのは不適切であることへの認識につながっているようである。例えば、カナダでお話を聞いた女性は、第2次世界大戦中の強制収容所生活は、同世代の子供たちとの集団生活であり、その後の苦労にくらべるとどちらかといえば楽しい思い出が多いと語ってくれた。これを聞いてある学生は、

それまで私は強制収容所というのは辛くて苦しいだけの施設だと思っていたんですけど、(子供時代に強制収容所で過ごした女性のお話をきいて)年代によって思うことが違うということをはじめ知ったので…一つのテーマを勉強するということはこういうことなのかと思って。自分が思い込んでいたことがほかの人の話によってひっくりかえらされるというか…こういう体験をされた方もいたんだ、こう感じた人もいたんだということを知って、これが深く勉強することなんだとこの旅行で知りました。

学生は、第2次世界大戦の体験といっても、捉え方は異なるのだと知る契機となり、さらに、そういっ

た考え方を総合的に理解し、物事を様々な視点からとらえなおしていくプロセスの重要性を感じたようである。

また、日系人といっても日本社会や文化との関わり合いの多様性があることの気づきにつながったものも多い。たとえば JCCCNC では日本人のように見えるスタッフであっても、必ずしも日本語を話すわけではないと知って、少し驚いた様子の学生もいた。日本人の顔かたちをしており、また日本関連の施設ではたらいっているのだから、当然日本語を話すことができるだろうという暗に思っている学生が多いのである。しかしいろいろな日系人の方と接して、そういった文化的アイデンティティーと言語とのつながりの想定は必ずしも適切でないとする契機となったようである。

さらに研修で出会う方々の多くは、国籍も日本でなければ、生まれ育ったところも海外である。にもかかわらず、お寺や県人会、文化施設といった現地の日本人組織との関係を持っている方々の様子をみることで、国籍や実際に住んでいる土地だけではとらえきれない文化的な関係を感じた学生も多い。日本人であるということにそれまで疑問を感じずにいた学生にとっては、新しい発見であり、それは訪問先の大学の先生から受ける話によってさらに理論的な深みを帯びる。日系人という具体的な例から考えを展開させ、文化的アイデンティティー一般についてその複雑性へ気づきの第一歩となっているようである。

2. 大学での学びについての振り返り

研修では、3つの大学を訪問し、各大学では学生によるキャンパスツアー、先生、学生による学部紹介があり、そこで学生は、同年代の大学生の学びの様子について知る。テーマに関連する学科や教員の話聞くのがその訪問の目的の一つであるが、加えて同年代の学生との接すること、そして各大学の特徴を知ってもらおうという意図もある。

大学の制度は様々あり、アメリカ、カナダでも異なる。背景知識が少ない学生は、ともしれば早口の説明に少し戸惑ってしまう場合も多い。しかし、キャンパスツアーや大学施設は似たようなところがあり、大学をめぐるにつれて学生の理解度も増してくる。それにつれて、日本での自分たちの大学生活との相違点に気づく学生が多い。

例えば、在学生在が訪問者の質問に的確に答え、意見を述べている様子を見て、彼らの成熟度にびっくりする学生も多い。ある学生は研修最後のキャンパスツアーで「キャンパスツアーでいつも感じるんですが、案内してくれる学生ははきはきしていてすごいなと感じました。」と述べ、常に感じる点として挙げている。

また、「自分の大学に誇りを感じて説明ができていく」、「生き生きとして自分の大学での学びや施設について語っている」との印象を述べる学生もいる。またデービスでの日本語のクラスの学生との対談では、日本語や日本文化に対する強い関心を持つ学生と接して、好きな勉強をしているのだと感じたとコメントする人もいる。ある学生は、日本では大学生になってより自由になったといっても日々の生活や課題等でしんどそうな学生が多くいるとした述べたうえで、こう語っている。

大学、結構のびのびしているんですね、学生が。(デービスで学んでいる)日本人の学生にもあったけど、すごく楽しそうだなーと思って。なんでかなーと思ったのですが、英語のプログラムやアジアアメリカンプログラムとか日本語プログラムとかで話を聞いて、本当に先生が場を提供して、生徒が自由に好きな勉強をしているんだなという印象がありました。

もちろん、すべての学生がそうではないだろうが、というコメントも後で付け加えているが、交流した学生やそのほかキャンパスで見かける学生の様子から活気を感じたと感じる学生が多い。

と同時にさまざまな大学の学部での取り組みを聞いて、それに触発される形で鳥取大学での学びや自分の学びとは何だろうか考える学生もいる。例えば、University of San Francisco では、従来のアメリカでの Ethnic Studies の枠組みをこえようと新設された Critical Diversity Program の訪問を振り返って、学生の一人は、

サンフランシスコだからかもしれないけれども、様々な文化があって融合しているところだからから学びたいという人がいて、学部が開設されているんだなと知っておもしろいなと思ったし、(鳥取の)地域学部とつながっているところがあるんじゃないかなと少し思いました。

と述べている。さらにこの学生の発言をうけるかたちで、別の学生は、

Critical Diversity Program は学問の枠を越えてとか、いろんな角度から見るということで(先の発言者)もいっていたんですけど、地域学部とかの勉強と共通点があるなと思ったし、ウェブサイトとかをみていて、世界を変えるととか、物事を批判的に見る力を身につけるとか言っていて、将来につながるのかもわからないけれどもどこかで役に立つような能力を手に入れることのできる大学なのではないかと思って、すごくいいなと思いました。

と語っている。他の学部の話も聞いて、自然と地域学部で取り組んでいることがほかの大学とも共通する重要な問題や視点なのだという事に気づいたようである。研修を通じて、日本での学びの視点の重要性の位置づけがよりはっきりしたのかもしれない。

また、自分の大学での生活や心の持ち方の変化を振り返った学生もいた。デービス校の榎原先生の日本での、そしてアメリカに移られてからの様々な体験についての話をうけて、ある学生は、「榎原先生から聞いた、自分に起きたことをそれなりにうけいれていくと何か開けていくというのは、すごく大切なことだなというか、ドンピシャな気がして。」と語った。そして、当初の志望とは異なる鳥取大学にきて、最初は大変つらく感じたこと、休暇も最初は鳥取から離れることが多かったことを述べ、だが最近は鳥取の良さや鳥取でしかできないことをできるだけ吸収できるようにと態度が変わっていった様子について語った。そのうえで、榎原先生の言葉が「自分にすごく突き刺さるとか、大学生活を凝縮してくれた言葉というか、すごくいい言葉だと思いました。」と語った。アメリカ、カナダの多文化社会についての研修での体験は、このように学生にとって自分自身の学びについても考えさせる機会を提供したようである。

3. 自分と周りとの関係性の捉えなおし

研修での体験は、文化的アイデンティティーや大学での学びの振り返りは、多くの学生にとって次のステップや今後のありかたについても考えるきっかけも提供している場合が多い。特に訪問先では外から見る日本や日本文化への関心に遭遇することが多く、自分が知らない日本に気づく学生も多い。たとえばカナダの Nikkei Center ではアニメのコスプレフェスティバルの参加者を見て、自分が知らない日本のアニメの関心の強さにびっくりしたとのコメントがいくつかあった。また日本語を学ぶ学生との対談では、日本の作家の文学作品について聞かれ、あまりよく答えられず反省したという声もあった。

そういった体験とともに榎原先生や日系アメリカ、カナダの方の体験談を聞いて、海外のことだけでなく日本についても学ぶ必要があると感じた学生が多い。たとえば、ある学生は

特に外国人と話すときは、日本文化についてもっと知る必要があるかなと思います。昨日話していて、私はあまり文学とか得意じゃなくて、話すことができなくて自分にちょっとがっかりした時があったので、もっと自分自身もだし、日本文化もだし、やっぱり知って

話してあげたら、コミュニケーションをもっとできるなと感じました。

と語った。日本文化だけでなく、自分自身やその知識のレベルを自覚する点にも触れている点で興味深い。

またアメリカ、カナダでの多くの人々の出会いは、日本と外国の文化への関心のあり方に関して考えたコメントも多い。例えば、日本だけ、海外の文化だけという風に「どっちかだけでなく、両方学ぶことはやっぱり大切なことなんだなとわかりました。」と語る学生がいた。また別の学生は、

できれば、理想的なのは同時にやること [日本の外にも内にも目を向けること] が大切だ
と
思っていて、日本の中でも鳥取にいとなかなか関西とか関東の学生とつながる機会がないんですよ。だから逆に鳥取だと内向的になってしまふことがあつて。でもそれだとやっぱりほかの学生が体験していることを全然知らないうちに進んでしまつて大学がおわつてしまふと、ちょっと損している部分もあるかなと思つて。同時に内と外を学ぶというのはすごく大切ななと思つました。

と述べた。学生は、学科も異なれば興味関心も様々で、特にアメリカやカナダに関心がある訳ではない。だが、北米での体験は、参加した多くの学生に、自分はどのように日本社会や文化を捉えているのかについて考える機会を提供しているようである。

研修で出会った方々の中には、戦争や社会状況から必ずしも望んでいた進路に進むことができなかった人も多い。その中でどう対処してきたかというお話は、学生たちの今後のあり方について考えるきっかけを与えたようである。そういったお話の一つを聞いて、ある学生は、「最初に自分の前にある道を進むと何かが開けてくるみたいな感じでおっしゃっていて」とのコメントに続いて、以下のように述べている。

私はずっと先生になりたいという思ひがあつて、ボランティアなどは参加しているんですけども、そのほとんどは子供とかかわるもので、将来につながるようなものしか目に入らなくて参加していなかったのですけれども。もっと視野を広げて違ふことも経験したら、いろんな視点で物事が見れたりするのかなと思つました。

様々な体験談を聞くにつれ、多角的に物事を見ることの重要性の気づきがあり、それを受けて自分の現状の振り返り、今後についての考えを巡らす様子がうかがえる。

また別の学生は、「生きていくうえでためになるような話をいっぱい聞いたな一と思つて」と語り、その後、日系1, 2, 3世の方の違いについて述べたうえで、今の自分の状況は必ずしも個人的な努力によるものではないとの気づきを以下のように述べている。

確かに、私は今回の研修のお金とかは全部アルバイトで払っているんですけども、アルバイトをしているってことも親のおかげなのかなつて。ここにいることって、本当に親の力があつてこそなんだな、そのようなことを思つて、帰つてからもお手伝いとかもいっぱいして、感謝の気持ちを伝えたいなつて改めて思つました。

この学生にとっては、日系の方々のお話は、自分を取り巻く状況を別の角度から考えるきっかけとなったようである。

他の学生のコメントの中にも、自分と社会とのつながりについて考えをめぐらした様子がうかがえるものが多い。例えば、アメリカ、カナダで住む日本人や日系人としてのお話を聞いて、日本とカナダといった国の架け橋となるような、あるいは親善大使となるようなかわり方の重要性を考えるようになったと述べた学生や、外国のことだけでなく、日本のことを知つて発信できるようになれたらという希望を述べた学生がいる。後者の学生は研修後の聞き取りでは、文化や情報等を発信できる職

種に卒業後の進路変更をしたと語っている。また別の学生は、研修後、自分の出身県の中にある移民を多く出した町を訪問したと語ってくれた。

このように研修は、単に日系人の歴史や多文化社会への知識獲得だけではなく、学生自身のあり方について振り返えるきっかけとなっている場合がある。そしてそういった振り返りは、学生自身の将来的な展望や向き合い方についての指針やその修正を促すこともあるようである。

IV. おわりに

ここでは、2013年度、14年度の北米プログラムの様子を中心に、学生の学びの様子を考察してきた。学生のコメントをみると、このプログラムでの学びは単にアメリカ、カナダでの多文化社会を学ぶというだけにはとどまらないことがうかがえる。それに加え、学生はテーマに沿って様々な話や資料を見ていく過程で、各自持っていた知識や想像の限界に気づき、鳥取大学での学びや、文化や社会と自分との関わりについて振り返っている。特にこのプログラムでは取り扱っているテーマと関連して、文化的なアイデンティティが国家という枠組みや地理的地域を越えて、多様な形で表れているのか、またそれが自分という存在とどのように関連するのかといった点に関して考えをめぐらしている様子のコメントも多くみられた。もちろんこういった考察は、海外フィールド演習といった形をとらなくても得られる場合があるかもしれない。しかし2週間弱の研修は、それまではじっくりと考えることの少なかった問題について向き合い、それを何らかの形で表現する良い機会を与えているようである。

今回は論文の関係上、学生の振り返りコメントを中心に考察したが、北米プログラムで学生が実際に触れることのできるトピックは数多くある。表6に挙げたのはその中でも代表的なもので、これらの中から学生がさらにその学びを発展させることや、今後の北米プログラムのテーマとして発展させることも可能である。

表6 北米プログラムで触れるトピックの例

トピック	例
歴史	北米における移民の歴史と現状、それに対する政策や文化的施設の役割
エスニシティ	エスニシティの複雑性、コミュニティの役割、現状
宗教	多様な宗教に対する認識、宗教の社会的、文化的な役割
教育	高等教育機関での学びの多様性、大学と地域コミュニティとのかわり
言語	エスニシティや文化継承等、言語の社会的な役割、英語のバリエーション、国際的なコミュニケーションツールとしての言語

ただ北米プログラ

ムは、海外フィールド演習として単位化されて、2年しか経過しておらず、今後においても研修での学びの考察を続ける必要があるだろう。また今後継続するにあたり、様々な課題もある。例えば、日本側、アメリカ、カナダ側とも、お世話になっている方々の移動や退職等にうまく対処する必要がある。窓口となっている方だけに依存するだけでなく、広くネットワークやコミュニケーションを取っていく必要がある。そのために、長期的な展開を見据え、双方向的な教育的、あるいは研究的な教員等の交流を図る必要がある。また研修での学びをさらに定着させるために、研修後の振り返りやサポートをどのように充実させていくのかといった課題もある。こういった課題は、ともしれば普段の授業や業務に追われてしまう中でなかなか取り組みが難しい。だが、研修の準備が遅れぬように、定期的にその計画や準備をする体制組むことで、徐々にではあるが取り組むことができるだろう。

北米プログラムを含め海外フィールド演習は、外国の地域を訪問し、普段の生活では経験しないような体験を学生に提供し、鳥取での学びを振り返り、地域を外から、そして多角的に考えるきっかけ

を与える。そして研修後鳥取に再び戻ることによって、そういった経験を活かす方法の模索につながる。この点で、地域を単に地理的なものだけではなく、地域が持つ社会的、文化的重要性を多方面に渡って学び、かかわれる人材を目指す鳥取大学地域学部のカリキュラムの一部として今後も重要な役割を果たす可能性は大きいといえ、今後の各プログラムの展開とその検証が大切であると考えられる。

註

¹ 例えば、応答の人類学 研究会 (日本文化人類学会課題研究懇談会)など。

² Race and Hispanic or Latino: 2010, United States Census Bureau を参照。

http://factfinder.census.gov/faces/tableservices/jsf/pages/productview.xhtml?pid=DEC_10_PL_GCTPL1.ST13&prodType=table%2520US%2520Census%2520Bureau

³ デービス市ホームページを参照。 <http://cityofdavis.org/about-davis/location-and-topography>

⁴ University of California at Davis のホームページを参照。2014年現在。 UC Davis Facts

<http://ucdavis.edu/about/facts/index.html>

⁵ Race and Hispanic or Latino: 2010, United States Census Bureau を参照。

http://factfinder.census.gov/faces/tableservices/jsf/pages/productview.xhtml?pid=DEC_10_PL_GCTPL1.ST13&prodType=table%2520US%2520Census%2520Bureau

⁶ 2011 Statistics Canada を参照。 <https://www12.statcan.gc.ca/census-recensement/2011/as-sa/fogs-spg/Facts-csd-eng.cfm?LANG=Eng&GK=CSD&GC=5915022>

⁷ 2013年度の北米プログラムについての学びについての考察については Naka, T. (2016). Encountering Others in Overseas Study Tours: An Examination of Educational Potentials. *International Journal of Social Science and Humanity* 6(9):714-718 を参照。

(2015年10月2日受付, 2015年10月6日受理)